

米軍普天間飛行場(沖縄県宜野湾市)の移設問題が行き詰まりの様相を見せる中、ドキュメンタリー映画「チビチリガマから日本国を問う！」(1時間46分)が都内で順次上映される。映画は、県民総決起大会や首相官邸前座り込み行動などで見せた沖縄人の姿を追いかけて、「日本の主権とは何か」と問いかけている。(秦淳哉)

チビチリガマとは読谷村に残る壕を指す。一九四五年四月、米軍は読谷村の西海岸から沖縄本島に上陸。地上戦が始まって米兵が迫る中、チビチリガマの中に身を潜めていた地元住民約百四十人のうち八十三人が「集団自決」する事態に追い込まれた。

映画は、犠牲者を追悼す

沖縄の反基地 追い続け



内閣府で抗議活動をする知花さん(左)と金城さん＝映画「チビチリガマから日本国を問う！」から

ドキュメント映画「チビチリガマから...」

「日本の主権」問いかけ

今年四月三日のチビチリ首相官邸前の座り込み抗議活動、同二十五日に読谷村から九日まで実施したであった十万人規模の県民

総決起大会まで、一連の様子を克明に描いている。官邸前の座り込みは、呼び掛けから十日後の緊急行動にむかかわらず、延べ千二百人が参加する規模に拡大した。

映画の主人公は、読谷村の金城実さん。知花さんは米軍楚辺通信所(通称・象のオリ)の返還闘争で先頭

に立つなど、沖縄と米軍の問題に深くかかわってきた。一方の金城さんも日韓の不幸な歴史の反省から、沖縄と韓国に建立した「根度」と起してはならない気持。運動の原点にはチビチリガマがある」と語る。西山監督は再び読谷村を

主人公2人「集団自決」原点に

二エースの追跡

舞台とした記録映画を撮り始めていた。ところが、普天間問題の解決期限が五月末に迫り、沖縄をめぐる動きが急展開したため、知花さん、金城さんの動きを中心に、この問題をテーマにした作品づくりを始めた。

西山監督は「戦後六十五年間、外国の軍隊が駐留する国が主権国家と言えるのが。根底にあるのが日米安保条約だとすれば、なぜ日本のほかの地域が基地を受け入れないのか。沖縄の問題は、日本の主権者意識を根源的に問うことになる。映画が地域と沖縄をつなぎ、平和への問いかけになればいい」と話している。

映画は、十七日午後七時から東京都世田谷区南鳥山の「らくだ」とTUBO(参加費八百円)、十九日午後七時から豊島区駒込の「琉球センター・どうたち」(同千五百円、ドリンク付き)、二十一日午後七時半から三鷹市野崎の「はちのこ保育園」(同八百円)でそれぞれ上映される。